

「何回赦すべきですか？」(要旨)
聖書箇所：マタイの福音書18章21~35節

【1】 赦すということ

主イエスはペテロの「何回赦すべきですか」(マタイ 18:21)という質問をきっかけに赦しについて教えられました。弟子たちはすでにイエスから赦しについて学んでいました(参照同 6:12,14-15)。堪忍袋の緒が切れるとありますように、人間には我慢の限界があります。弟子たちは実際に仲間を許す場合の限度を定めておきたかったのでしょうか。当時のユダヤ教の教師は三回赦せば十分と教えていました。したがってペテロの「七回まででしょうか」(同 18:21)は、彼の想定し得る赦しの最大限度であったと思われるかもしれません。ところがイエスは「七回を七十倍するまでです」(同 18:22)と、赦す回数に限度はないと明言されたのでした。イエスは弟子たちの想定をはるかに超える赦しを教えられました。

【2】 一万タラントの負債

アダムの墮落以来、人は限度のない復讐を繰り返してきました(創世記 4:24-25)。一方で、イエスはご自分に従う者たちに赦すことを教えておられます。イエスが言うように、果たして人は限度なく赦すことができるのでしょうか。戸惑うであろう聞き手のために、イエスは一万タラントのたとえを用いて説き明かされました。

まず、このたとえは、天の御国の王が自分の家来の莫大な負債を無条件に免除したことが語られています。この家来には一万タラント(普通の労働者の十六万年分の労賃に相当!)の負債があり、到底返済不可能な額でした。家来をかわいそうに思った主君は、彼を赦し負債を免除してやったのです。この主君の対応は決してありふれたものではありませんでした。

次に負債を免除された家来の振る舞いに焦点が当てられます。彼は負債が免除された後、百デナリを貸していた仲間に出会います。百デナリは少額ではありませんが、

家来が君主に免除してもらった負債の六十万分の一の額です。しかし彼は自分が負債を免除されたことを忘れたかのように振る舞いました。仲間の嘆願を聞き入れず、牢に放り込んでしまったのです。仮にこの家来が一万タラントの負債を免除してくれた主君に心から感謝していれば、主君を思い出し、主君に倣って負債のある仲間にあわれみの心を示すことができたでしょう。しかし彼は自分の負債が免除された事実を忘れたかのように振る舞いました。主君は、家来があわれみによって赦されたにも関わらず自分の仲間にも全くあわれみにかけてやらなかったことに怒りを表しました(同 18:33)。

【3】 赦しの原動力

ところで、主君が家来を赦した動機は何であったのでしょうか。それは主君の家来をかわいそうに思う心でした。

▶「かわいそうに思って(σπλαγχνίζομαι)」

このたとえに登場する天の御国の王は神のことです。一万タラントの負債のある者は罪人である私たちのことです。私たちは神の前に到底赦されない、償い切れない負債を負っていました。罪のゆえに滅びるしかない私たちを見て、神は深くあわれみ、一人子イエス・キリストをこの世に送って下さいました。イエスが十字架にかかり、私たちの代わりに罪を償うためにです。イエスの十字架の贖いによって私たちの罪は赦されたのです。

▷神による罪の赦しを経験した者は、神のあわれみの心を思い出し、自分の兄弟の罪を心から赦すようにとイエスは私たちに教えています(マタイ 18:35, エペソ 4:32, コリント 3:13)。

